

研究課題	『十卷章』内の諸著作の再考察、 及びそれに相對する末積類の整理と考察
研究代表者	舎 奈 田 伊 左 見 (仏教研究科博士後期課程仏教学専攻)

## ①. 研究の目的

本研究は、真言宗の重要な教義を示した典籍の内、『即身成仏義』一卷・『声字実相義』一卷・『吽字義』一卷・『弁頭密二教論』二卷・『秘蔵宝鑰』三卷・『般若心経秘鍵』一卷・『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』一卷（以下、『菩提心論』と略）、以上の全十巻七種を集成した『十巻章』一卷と、『十巻章』内に収められている諸著作に相對する末積（注釈書）を、総合的に考察・整理することを目的とした。

問題の所在として、『十巻章』内の諸著作に対する、真言宗及び真言密教に伝えられる代表的末積の総合的な整理が、現在まで遅れていることが指摘される。『十巻章』の諸著作、及び各末積ごとの先行研究や先行論文については、現在多数刊行されている。しかし、末積類の先行研究を見ると諸先生がそれぞれ独力にて研究されており、取り扱える末積の数は自ずと限られてしまっている。そこで、多数の末積が研究の重要性と使用頻度が高いにも係わらず、これを一斉に整理・考察している先行研究が数少ないことを問題視し、『十巻章』内の諸著作の再考察と、それに相對する末積類の整理と考察を共同研究として総合的に行うことにした。

本研究では、『十巻章』内の諸著作について先行研究を基に再考察すると同時に、諸著作に相對する末積類数本を取り上げて考察・整理する。これにより『十巻章』内の諸著作の理解を深めると同時に、末積類を考察・整理することで、1、各末積の考察 2、末積同士の思想の同異の比較 3、時代ごとの思想の変遷 4、末積の考察を通しての『十巻章』諸著作の総合的考察などの研究成果が期待できる。

研究方法として、『十巻章』に収められている全七種の諸著作の内、一種を選択し先行研究を基に再考察すると同時に、その著作に対応する数本の末積を対校し、整理・考察する。同時に各末積を比較検討することによる末積自体の整理と考察、加えて、著作と末積の総合的な考察・整理を行う。

本研究を行うにあたり、1、真言教学の根幹となる『十巻章』の詳細な研究の遅れ 2、各末積に対して

の使用頻度の低さ 3、総合的整理・考察の弊害 の3項目を主な問題点として挙げ考察を進める。

第1に『十巻章』に収められている各著作の再考察が挙げられる。『十巻章』を綿密に再考察することは、真言学専攻の学生には教義の根幹として重要なことである。

第2に、末積類自体の考察である。先行研究で扱われている末積は数多くあるが、自身の研究で取り上げない限り、実際に考察する機会は少ない。また末積自体の数も多く、これを一人で考察するには時間を要する。

第3に、総合的整理と考察である。『十巻章』内の諸著作、一つ一つに相對する末積の数が多し事にも起因するが、個人によって、それらを整理・考察し、総合的に取り扱うことは相当の時間と能力と熱意を必要とするだろう。特に大学院生個人の限られた時間のなか、これらを整理・考察することは困難である。

以上の理由から、現在に至るまでの、『十巻章』の諸著作に相對する末積類の総合的整理・考察の遅れ等を解決すべく、共同研究の形態を取りつつ、『十巻章』の諸著作の再考察と同時に、諸著作に相對する末積類の総合的整理・考察を進めた。

本年度は、龍猛造『菩提心論』一卷を考察した。本年度に研究する『十巻章』内の著作を選定するにあたり、『菩提心論』を選択した理由として、この著作が空海教学にとっていかに重要であるか、また昨年度に研究した『即身成仏義』との関連を加えて箇条書きまとめた。

○『即身成仏義』の最初に即身成仏の経証として掲げられる二経一論八箇の証文の中、一論は『菩提心論』を指す。昨年度研究の『即身成仏義』と本年度研究の『菩提心論』との大きな関連性がある。

○『秘蔵宝鑰』の第十秘密莊嚴心の説段において、『菩提心論』の三摩地段の全文が引用されている。

○『秘密曼荼羅十住心論』に説かれる十住心構成の各住心の典拠として、『大日経』住心品とともに、勝義段・三摩地段が引証されている。

○『弁顯密二教論』において、顯密差別に関する經論の記述を十五箇所引証する内、第十に『菩提心論』を引用し、『菩提心論』がいかに重要な書物であるかを指摘している。

○『菩提心論』は密教の觀行を体系的に述べている著作である。その觀行の体験の世界を示す三摩地は、空海教学の特色ある要素の中で最たるものである。

以上の点が端的に示せるが、研究対象としても空海教学にとっても『菩提心論』が重要な書物であることは明らかである。よって2009年度は『十卷章』中、『菩提心論』を考察した。

## ②. 研究の経過

2009年度は、『十卷章』内の中から『菩提心論』を選択し、その末積、計五本を整理・考察した。また現在刊行、または未刊行の『菩提心論』関連の末積の古写本・古刊本（以下、聖教と略）を、各大学や各寺院に閲覧・複写させて頂き、整理・考察の一助とした。2009年度の研究経過のおおまかな流れとしては、下記の通りである。

- ・2009年4月～2010年3月  
一ヶ月に最低一回の研究会を開催
  - ・2009年4月～2010年3月  
約二ヶ月に一回、データ打ち込みを実施
  - ・2009年5月27～28日  
高野山大学図書館・高野山親王院へ聖教調査
  - ・2010年1月29日  
茨城県水戸市六地藏寺へ聖教調査
  - ・2010年2月23日・24日  
高野山大学図書館へ聖教調査
- 『十卷章』内の諸著作に対する、『弘法大師著作全集』に記載される末積数本を中心に整理することにより、その末積自体を考察すると同時に、『十卷章』の総合的考察を行った。その方法として、『弘法大師著作全集』に記載される代表的末積を参考にして、刊行本を基にし、次の事項に留意しつつ分担作業によって整理、考察を進めた。
- ・配布した資料（刊行本コピー）の原文を忠実に打ち込むことを基本とする。
  - ・訓点が付いているものは入力する。
  - ・「朱書」「割注」等については脚注の形態で入力する。
  - ・『菩提心論』の底本として、長谷版十卷章を使用し、『大正新脩大藏經』を対校本とする。

2009年は2008年度の研究を踏まえ、平安期～江

戸期にかかる広範囲の時代把握と、2008年度に研究対象とした僧侶と出来る限り重なるように研究対象を設定した。

○龍猛造

『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』

『長谷版十卷章』

○覺鑊（1095-1143）

『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論題釋』

『興教大師全集』上巻

○道範（1184-1252）記

『菩提心論談義記』二巻

『日本大藏經』四七巻 論藏部 真言密教論章疏四

○頼瑜（1266-1304）

『菩提心論初心鈔』二巻

『日本大藏經』四八巻 論藏部 真言密教論章疏五

大正大学・高野山大学に古本有り。

○宥快（1345-1416）口

『菩提心論引音』一巻 『続真言宗全書』十一巻

○浄巖（1639-1702）

『菩提心論講要』一巻 『真言宗全書』八巻

高野山大学に古本有り。

## ●作業手順

- ・『菩提心論』の末積類を五本選択。これを研究代表者と研究分担者、及び研究協力者（大学院生）を含む十二人で分割し、担当する。
- ・『菩提心論』の内容を、①「序文」②「行願」③「勝義」④「三摩地」という四つの段落に分けるとし、データの打ち込み作業もこの段落で進めていく。

また、本研究に協力して頂いた方は下記の通りである。

榊義孝	本学准教授	山口史恭	本学講師
粕谷隆宣	本学講師	舍奈田智宏	本学副手

竹岸貢嗣	仏教学専攻真言学	博士2年
孤島玄明	仏教学専攻真言学	博士1年
寺山賢照	仏教学専攻真言学	博士1年
牛久智充	仏教学専攻真言学	修士2年
中村賢識	仏教学専攻真言学	修士2年
若槻隆範	仏教学専攻真言学	修士2年
新井弘賢	仏教学専攻真言学	修士1年
服部俊秀	仏教学専攻真言学	修士1年
平井俊和	仏教学専攻真言学	修士1年
森脇 徹	仏教学専攻真言学	修士1年

## ③. 研究の成果

本研究は、前述したとおり、『十卷章』一卷と、その諸著作に相対する末積（注釈書）を、総合的に考察・整理することを目的とし、研究してきた。

2009年度は、『十卷章』内の中から『菩提心論』一卷を選択し、『菩提心論』に関する末積計五本を整理・考察した。また『菩提心論』関連の末積の聖教を、各大学や各寺院に閲覧・複写させて頂き、整理・考察の一助とした。

研究の成果としては、まず『菩提心論』及び末積のデータ化である。現在の『菩提心論』の末積類は紙面の媒体を取っており、かつ個々の学僧の末積類でまわっている。これをデジタル化し、パソコン上で検索・比較することができるようになったことは、一つの成果とみることが出来る。本研究の第一の目的が、このデータ化と整理であったので、一応の成果とする。これにより2008年度にデータ化した『即身義』とその末積の研究成果との比較・並列が可能になり、それを用いての整理・考察は昨年からの大きな目標の一つであり、内容考察と比較が容易になった。

次にデータ化するにあたり、実際に末積を閲覧・考察できたことは、共同研究の形態を保ちながら、個々人の研究に応用・還元ができたといえる。協力者も含めて、本研究に積極的に取り組んで頂いたので、多くの知識を吸収できたことと思う。あわせて、この個々人の知識が全体の知識として再び還元され、学力の底上げがなされたのではないかと思う。

また聖教調査に関しては、研究当初から、現在刊行されている末積のみの整理・考察データ化では、共同研究の成果として、また個人研究の接点としても不足していると考え、聖教調査をすることにした。昨年度に続き、2009年本年度も、本学講師の粕谷隆宣先生・藤田祐俊先生・山口史恭先生にご指導頂き、聖教調査における手ほどきを受けた。特に、粕谷先生におかれましては、茨城県水戸市六地藏寺への聖教調査に関しては同県内の寺院関係ということで多大なるご助力を頂いた。

前述したとおり、2009年度は以下の通り聖教調査を行った。

- ・高野山大学図書館・高野山親王院へ聖教調査
- ・茨城県水戸市六地藏寺へ聖教調査
- ・高野山大学図書館へ聖教調査

の計三回の聖教調査を行った。2009年度に初めて聖教調査に行った茨城県水戸市六地藏寺については、2009年度以降の長期調査協力を申し出たところ、了承の返事を頂いている。六地藏寺所蔵の古写本・古刊本

の中に室町時代の学僧、恵範の書が多く見られる。すでに東京帝国大学教授平泉澄博士によって六地藏寺所蔵の古写本・古刊本の調査が行われており、文学や史学の方面からの研究はされているが、未だ仏教学・真言学における研究はほぼ手つかずの状態であり、神奈川の金沢文庫に並ぶ関東における仏教学・真言学の有力な研究対象となり得る。今年度は恵範の直筆とされる聖教を数点のみ調査し、撮影させて頂いた。

高野山大学については同大学図書館所蔵の『十卷章』に関する聖教のデータをあらかじめ調査・整理し終わった。同大学図書館では現在、貴重本のデータベースが作成されている途中であり、それに先んじてデータを調査・整理し終わったこと、未完ながら同大学図書館データベースとの対校・リンクが出来るようになったことは成果である。今後は今年度まとめたデータを基に聖教の複写・閲覧申請も視野に入れていきたい。また、これから調査する予定の寺院・研究施設の金沢文庫・種智院大学についても調査を進め、当該の寺院・研究施設から収集した古本・刊本類についても、今後研究をしていきたい。

日数の問題もあり、2009年度における聖教調査の成果もまた、満足出来るものではない。しかし、諸寺院・諸研究機関との接触と研究についての足がかりが得られたことは意義深いものがあつた。高野山図書館における『十卷章』関連の聖教のデータも一通り採取でき、今後の研究の大きな糧となった。

その他、聖教調査の成果として、

- 協力者の学生達も、聖教に興味を持ち、実際に調査・複写願いを出し、自身の論文や学会の発表に使用するなど、聖教調査と写本研究を積極的に行い、個人の研究に役立てている。
- 聖教に直に触れるにあたり、取り扱い等の初歩的な注意から、聖教の年代・紙質・筆跡・読み方・データの取り方を、諸先生に教授して頂いた。このことは、研究に携わった学生全員が個人の研究に応用できる知識・技術となるので大いに感謝している。
- 聖教調査の申請願いを申し出た諸寺院・諸研究機関の多くには、概ね協力的な返信を頂いる。これらの繋がり、学生個人の研究の足がかりにもなり得ると思われる。
- 学生の中には、辞書の種類や使い方、諸寺院・諸研究機関に送付する申請書一枚をとっても書式が分からずにいた者もいたが、共同研究に重ねて出席していく中で、少しずつ知識や技術を修得していった。この研究を通じて、こうした知識や技術が携



わった学生や豊山閲覧室に残せたことを成果の一つとする。

以上、端的に挙げれば、上記の事柄をもって成果とする。

#### ④. 研究の課題と発展

2009年度は、『菩提心論』一卷とその末積五本をデータ化することが出来た。しかし、各末積の内容考察に関しては今一步踏み込めなかった。2009年・2010年と同じ人物の著作を取り扱っているため、いち早くこれらの内容考察と比較考察を行いたい。

また、収集した聖教について、内容考察も進行中である。今後も、聖教調査予定が多く、古本類、目録類が増えることが予測され、これらを考察・データ化することにより、今後の研究の進捗状況が変化することが予想されるため、考察・データ化も同時進行させていきたい。

なお、すでに調査に行った研究機関・寺院である、大覚寺・高野山親王院・高野山大学・六地藏寺については、来年度以降の長期調査協力を申し出たところ、了承の返事を頂いている。今後、調査予定の仁和寺・高山寺・金沢文庫についても、近いうちに調査依頼を申し出て、調査・研究を進めて行きたい。

#### 個人研究との関連

本年度の共同研究の成果は、代表者自身の個人研究にも大きく反映されるものであり、個人研究との接点と、成果について以下に述べる。

共同研究との接点、及び共同研究の成果と博士課程論文との、主な繋がりとしては、

#### ① 個人研究の時代設定の拡大

現段階の個人研究の時代設定は平安期から鎌倉期としている。しかし、この設定は真言宗における往生・成仏思想と臨終行儀の基礎が、同期間に培われたということを予想しての設定である。むしろ、今までの先行研究で触れられてこなかった鎌倉期以降の往生・成仏思想と臨終行儀、引いては現在まで日本仏教が先祖祭祀、死者供養との繋がりを考察する上で、共同研究の考察は大きな意義があった。共同研究における時代設定の拡大に際して、今回の真言宗の代表的末積類の考察は、各々の時代背景を探る上で、また各時代の比較検討を行う際に重要な考察資料となりえるからであ

る。また、日本史を満遍なく勉強する機会にもなり、史学的背景の重要性とその考察・資料を得る機会ができた。

#### ② 教義と信仰の両面からの考察

往生・成仏思想と臨終行儀を考察する上で、仏教側からの教義と、一般民衆側からの信仰というものは、切り離せないものである。信仰については、往生・成仏思想や臨終行儀は、ある側面から見れば、一般民衆が政治・社会情勢、地域、宗派などの様々な影響を受けながら儀礼や教理を信仰により作りだしたと言える。教義を見れば、数多くの諸師が、往生・成仏思想や臨終行儀の様々な展開をし、多くの著書を著している。これは当時の多くの仏教者が、自分や周囲の人間の往生や成仏について模索していたことを伝えるものである。その発展には教義が必要不可欠であり、その発展も末積類に残されているはずである。特に、個人研究で考察中の人物の著書とされる末積類については、是非とも自身で詳細に考証したいと考えている。以上のことから、末積類の考察は、個人研究の支柱の一つとして重要になってくる。実際に自身の研究に使用できるほどの考察は未だ進んでいないが、教義、事相、修法面の資料を見られたことは大きな収穫となった。

#### ③ 真言密教の教義から考察した往生・成仏思想と臨終行儀

共同研究の成果によって、真言密教の成立・発展過程を通しての成仏・往生思想と臨終行儀の考察が可能になる。特に、真言宗における成仏・往生、臨終・葬送の本質を探るという個人研究に合わせて、共同研究における真言密教の教義的な根幹を再考察したということは大きな意義を持っている。また、共同研究により、真言密教の教義を考察すると同時に、史学的見地の習得、人物の関係確認、写本・刊本の考察などの様々な恩恵を受ける事ができた。これらのことは、仏教学、文献学を専攻とする者にとって重要なことであり、これらの技術能力の底上げが出来る事は自身のこれからの研究に大きな糧となる。特に、現在の個人研究のテーマは、絞った時代設定をしており、これに平安期から江戸期までの大きな時代の流れを通しての真言密教の教義を加えることで、広大な視点を持って個人研究を行なう余裕が生まれる。ここに、現在の個人研究(ミクロな視点)と共同研究(マクロな視点)を合わせて、一つの大きな研究成果を出すことが可能と思われる。

## ④ 各方面の支援と繋がり

2008年度に続き、2009年度の研究を共同研究の形態をとり、その代表として研究をさせて頂いた。しかし、諸先生のご指導、ご鞭撻がなければ、共同研究としての成果を出すことは難しかった。特に、聖教調査を通じての諸先生のご助力は並々ならぬものがあり、それをなくして2009年度の調査研究はここまで円滑に進まなかったと思う。また諸先生のご協力により、諸寺院・諸研究機関との調査交渉も無難に進んだ。これらの繋がり、研究を超えて、私自身の糧とさせて頂いた。また、多くの学生の積極的な協力がなければ、本研究は成り立たなかった。個々人の研究を続けながら本研究にも積極的に協力してくれた研究協力者には改めて感謝すると共に、研究分担者である沼尻憲尚さんには、格別に感謝の意を表したい。

以上のような事を、共同研究と個人研究の接点、及び博士課程論文との、主な繋がりとして記す。

本研究の成果内容と予定している博士論文の内容との関連

本年度の研究成果内容と予定している博士論文の内容との関連とを、上記内容と重複してしまう箇所があるが、以下に記述する。

私自身の個人研究のテーマは、『鎌倉期の密教臨終行儀の研究』と題し、平安期から鎌倉期における往生・成仏思想と臨終行儀について、テーマとしている。取り扱う人物としては、平安末期から鎌倉期にかけての諸師、例えば覚鑿(1095～1143)、明恵(1173～1232)、静遍(1166～1242)、道範(1178～1252)などを重点的に考察対象としている。

この諸師達は鎌倉期の高野山、及び京都諸寺院で活躍した人物である。その点、本研究で高野山や京都諸寺院を中心とした聖教調査を行えたことは、個人研究にも非常に益があった。特に、近年の先行研究では今まで未発見の著作や、考察が乏しい史料などが高野山、京都諸寺院で発見されている<sup>1)</sup>。諸師の著作は散逸している場合も多々あるが、それら未発見の史料が、これらの寺院に残されている可能性は十分にあると予測される。このことから、今後の聖教調査で個人の研究に関係する聖教の精査な調査・考察を加えていきたい。また、関東においても金沢文庫や六地藏寺など、研究に値する機関や寺院は数多く残されている。これらのことも考慮し、今後も研究を重ねていきたい。

また、本共同研究は真言宗の代表的末積類の考察をしており、各々の時代背景を探る上での重要な考察資料であるとともに、その内容として教義の発展も末積類に残されていた。個人研究のテーマである、成仏・往生思想と臨終行儀の基礎には、歴史的背景や真言教学の教義に基づいた思想がある。実際に私が担当させて頂いた覚鑿・道範の末積には、両師の思想的特徴が現れており、自身のテーマに直接還元できる成果であった。特に昨年度は成仏(即身成仏)思想の研究と、本年度は菩提心の研究を行え、臨終や葬送の研究を行うにあたり、この二つの思想は重要な研究対象となれる。

博士論文では、本研究で取り扱った資料を直接用いて考察することは、テーマの設定上、残念ながら出来ない。しかし、考察の前段階や教義の根幹を探る上で本研究は非常に役立つものであり、かつ今後の調査・考察内容によっては、直接、自身のテーマに結びつけることも可能性として少なくない。

## 註

- 1) 例えば、平成15年度『印度学仏教学研究』第五十一巻に佐藤もな先生「道範著『貞応抄』に関する一考察—東寺観智院所蔵本を中心として—」がある。佐藤論文では新出資料の東寺観智院所蔵本が使用され、今まで研究がされていなかった『貞応抄』の研究がなされている。

## 参考文献

- 『真言宗十卷章 豊山長谷寺蔵板』  
『弘法大師全集』第八巻  
那須政隆『即身成仏義の解説』成田山仏教研究所、1980  
勝又俊教『弘法大師著作全集』山喜房仏書林、1988  
小田慈舟『十卷章講説 上巻』高野山出版社、1984